「暇人が読む二人制審判員の瓦版」　No,22　2025/11 月号

球審の処置は正しかったのか

2025/8/28

日本時間 8/28 のロサンゼルス・ドジャース対シンシナティ・レッズ戦、ドジャースは大谷翔平が先発し、３回の表にソロホームランをマルテに打たれたものの４回裏に４点をあげて逆転。大谷は５回を投げ、勝ち投手の権利を得て降板。そのまま、1-4 でリードした６回裏ドジャースの攻撃での事。１アウトの時、ライト前ヒットで出た１塁走者コンフォートが、ボールカウント 1-1 からの 3 球目に 2 塁に走り、アウトかと思われた捕手の送球を回り込み右手でベースをタッチし間一髪でセーフ。直後にドジャースのロバーツ監督が出て来て球審に抗議。すると盗塁時の打者ロハスの空振りの映像に切り替わった。
ロハスが空振りし、スイングの余勢でバットが、2 塁に送球しようと踏み出した捕手の左脚太ももに当たっている映像である。ジーザス球審は「打者が捕手の送球を妨害した」として、打者アウトにし走者を１塁に戻した。この処置に対してロバーツ監督は抗議をしていたのである。しかし、抗議は聞き入れられず、2 アウト走者１塁で試合は再開される事となり、球場にはブーイングが響き渡った。ベンチに帰ったロハスが不満そうにチームメイトと話す映像が流れていた。

さて、球審の処置は正しかったのだろうか？野球規則　「6.03a3・4 原注」では、以下のように記されている。

「‥‥打者が空振りし、スイングの余勢で、その所持するバットが、捕手または投球に当たり、審判員が故意ではないと判断した場合は、打者の妨害とはしないが、ボールデッドとして走者の進塁を許さない。打者については、第 1 ストライク、第 2 ストライクにあたるときは、ただストライクを宣告し、第 3 ストライクに当たるときに打者をアウトにする。(2 ストライク後の〝ファウルチップ〟も含む)」

とある。これは、【原注】であるから、MLB で適用されているものである。打者ロハスが空振りし、スイングの余勢でバットが捕手に当たったのは故意では

ないように見えたし、三振目でもなかったので、打者をアウトにしないで打者にはストライクを 1 つカウントし、走者を 1 塁に戻して試合を再開するのが正しい処置と考えられる。MLB はアウト・セーフの結果のみ場内アナウンスをするだけなので、その点は NPB の様に丁寧なアナウンスをした方が観客には理解しやすいだろう。この試合は 1-5 でドジャースが勝利し、大谷は 794 日ぶりに勝利投手となった。

Detached（ディタッチド） Equipment（イクイップメント）

2025/9/14

右図は 9 月の研修会での映像の一コマである。とても珍しい光景で、多くの審判員は試合で遭遇したことがないかもしれないが、得点にも絡む可能性があり、知っていなければならないルールである。“Detached（ディタッチド） Equipment（イクイップメント）”である。選手が身につけている道具（帽子・ミット・マスクなど）を外してボールに触れる行為を言う。図の場合は、投球を捕手がマスクで止める場面であるが、インプレイであり、ボールに触れた時点で走者には占有していた塁から 1 つ進塁権が生まれる。もし、3 塁に走者がいれば得点となる。以前、ラソーダ監督がドジャースを率いていたときに最終回の攻撃、走者 3 塁で同じ出来事が起き、サヨナラ勝ちを収めたことがあった。知らなければ見過ごしてしまうだろうが、時には試合の勝敗を決することにもなりかねないのである。球審の鋭い視線が印象的な一コマでもある場面だ。ちなみにラソーダ監督は、メジャーの現役年数は短いが監督年数は長く日本でも非常に有名な人物である。彼は「背中の名前の為にプレイするのではなくい、胸の名前の為にプレイしろ」と個人プレイではなくチームプレイに重きを置くように言い続けた監督でもある。この監督のチームプレイを大切にする精神は、現在のチームにも生き続けているようだ。

難しい質問

2025/9/28

０アウト(１アウト？）満塁で、内野手は前進守備をしいていた。打球は強いショートゴロ、遊撃手が前に弾きワンステップ・ワンリーチの距離にあり拾おうとしたところへ２塁走者が走ってきて、打球を蹴ってしまった。球審はタイムをかけて試合を止め走者をアウトにした。走者は意図的に妨害をしたのではないと見たが、走者をアウトにして満塁で再開しようとしたところ、攻撃側の監督から、「野手に触れた打球に当たったのでインプレイではないか」と抗議があったが、「野手が前にはじいた打球であるが、ワンスステップ・ワンリーチ内ですぐ処理しようとするファーストプレイの状況で走者が打球に触れたので守備妨害です」と説明したが正しかっただろうかという質問であった。

この事例で審判員を悩ましたのは、野手に触れた打球が後ろや側方に大きくそれた場合ではなく、ファーストプレイの野手が打球を前にこぼしすぐに拾って処理しようとしているケースであるからだろう。つまり、ファーストプレイが完了してない状態で、走者が打球に触れたケースである。

野手に触れた打球に走者が触れた場合の規定をみてみよう。

6.01a(11)(A)

「いったん内野手(投手を含む)に触れたフェアボールに触れた場合‥‥には、審判員は走者が打球に触れたという理由でアウトを宣告してはならない。‥‥」

5.09b(7)【注 1】

「‥‥いったん内野手に触れた打球に対して守備しようとする野手を走者が妨げたときは、5.09b(3)によってアウトにされる場合もある。」

5.09b(3)　走者アウトの項目

「走者が、送球を故意に妨げた場合、または打球を処理しようとしている野手の妨げになった場合。」

上記の波線（場合もある）は、ファーストプレイの野手が前に打球をはじき

すぐに拾ってプレイをしようとしている場合に適用されると考えてよいだろう。よって、守備妨害で２塁走者にアウトを宣告し打者走者は１塁へ、１塁走者は押し出されて２塁へ、３塁走者は投球時の３塁へ戻して試合を再開した判断は正しかったと考える。このケースは応用問題であったが、現場の審判員の知識と判断を称賛すべきである。

試合開始すぐに妨害発生

2025/10/13

２人制の試合、１回の表、０アウト走者１塁で２番打者が１塁にフライを打ち上げた。捕球されると判断した１塁走者が帰塁しようとしたとき、捕球体制に入っていた１塁手に接触した。では、どの審判員がどう処理すればよかったのか？塁審がタイムをかけて、インターフェアーを宣告して走者をアウトにし、打者走者を１塁に行くように指示を与えればよい。塁審がコールをしなかったので、球審がコールしたが。試合後攻撃側だった監督が、接触しても１塁手が捕球できたから、妨害を取る必要はなかったのではないかと質問に来た。

ルールでは妨害が発生した時点で処置をするのが正しいことを伝えると選手が入れ替わるだけなのでどちらでもよいのではという意見であった。では、接触後、落球したボールが勢いよく転がって行き走者も打者も進塁したらこのようなことは言わないだろうし、１塁走者より打者の方が俊足であればこのような発言は勿論しないはずである。

またまた起きてしまった

2025/10/19

同点のまま試合が進み終盤に入った優勝戦。チェンジとなって選手たちが守備に入って行った。ショートの選手が投手板に立って、投手を待っていた。投手がマウンドに行き、ボールを受け取った。そのとき、球審から守備側の監督に投手の交代になることが告げられた。監督はどうしてなのか面を食らったようである。5.10(j)の内容を説明され、ショートと投手を入れ替えて試合が開始

されたが先頭打者にヒットを打たれて、元の投手がマウンドに戻った。このヒットが点に結び付き、最後まで追いつくことができなかった。

珍しい出来事であるが、前日も似たような光景に遭遇した。審判員はプレイが行われているときは勿論、イニングの合間も注視していなければならない。

イニングの合間は、審判員の休憩時間でない。特に投手板付近や今までの投手がファウルラインを越えたかどうかもしっかり注視しておかなければならないのである。投手が交代することになるか、そのまま投手を続けることになるのかは、試合を大きく左右することになるので、ルールに精通し注意を怠らないことが肝要である。以前の瓦版に掲載したが内容だが、審判員はしっかり頭に入れておいてほしい。

「5.10(j) 交代発表のなかったプレーヤーの取り扱い

代わって出場したプレーヤーは、たとえその発表がなくても、次のときから、出場したものとみなされる。

(1) **投手ならば、投手板に位置したとき。**(←ボールを持っているかどうかは関係ない。)

(2) 打者ならば、‥‥。

(3) 野手ならば‥‥プレイが始まったとき。

(4) 走者ならば‥‥。

本項で出場したものと認められたプレーヤーが行ったプレイ、およびそのプレーヤーに対して行われたプレイは、すべて正規のものとなる。」

また、今まで投球していた投手がイニングの初めに以下のような場合は、続投しなければならないので掲載しておく。

「5.01(i) すでに試合に出場している投手がイニングの初めにファウルラインを超えてしまえば、その投手は、第1打者がアウトになるかあるいは一塁に達するまで、投球する義務がある。‥以下略」

審判員は、投球判定やアウト・セーフの大切なジャッジをするだけでなく、試合を公平・円滑に進行するために規則を正しく適用しなければならない。くどい様であるが、そのためにイニングの合間もグランド内の注意を怠ってはならないのである。

話題になったオブストラクション

2025/10/19

「1アウト走者1･2塁で打球が外野へ抜け、２塁走者が３塁を回るところで３塁手と接触し、審判員はオブストラクションのポイントをした。その後、走者は本塁へ走り外野からの返球でダッグプレイとなった。タイミングはアウトであったがオブストラクションがあったのでセーフだと判断した直後に捕手が３塁に送球し、１塁走者はタッグアウトになった。」これが審判員の間で話題になり、「このケースは、上記の様にプレイが一段落するまで流してから、２塁走者は本塁生還を認め、１塁走者はアウトで処置すべきだ」という答えに落ち着いたそうである。

オブストラクションの(２)項のケースである。公認野球規則 6.01h(2)では、「走塁を妨げられた走者に対してプレイが行われていなかった場合には、すべてのプレイが終了するまで試合は続けられる。審判員はプレイが終了したのを見届けた後に、初めて〝タイム〟を宣告し、必要とあれば、その判断で走塁妨害によってうけた走者の不利益を取り除くように適宜な処置をとる。」
と記されている。

野球審判員マニュアル第５版（第４版でも良いが）を開き、規則適用上の解釈を見ると、
「(2)項の場合、審判員はオブストラクションが発生したところをポイントし、“ザッツ・オブストラクション”と声を出してはっきりとコールする。しかし、ボールデッドにはならず、プレイが一段落（すべてのプレイが止まり、次のプレイがないと思われる状態）してから審判員はタイムをかけ、オブストラクションの弊害を取り除く。(２)項では、すべてのプレイが一段落するまで審判員

はタイムをかけてはいけない。」
と記されている。そして、更に以下の様に記されている。
「(2)項の場合、たとえ、オブストラクションを受けた走者にプレイがなされていてもプレイは一段落するまで続けられる。しかし、**オブストラクションを受けた走者がオブストラクションで与えられるであろう塁に到達する前にタッグアウトになった場合、審判員はタッグアウトになったときにタイムをかける。その後、審判員はその走者のオブストラクションの弊害を取り除く。**」（太字は筆者）
とある。つまり原則は、すべてのプレイが一段落するまで審判員はタイムをかけてはいけないが、オブストラクションを受けた走者がオブストラクションで与えられるであろう塁（今回の話題の場合は本塁）に到達する前にタッグアウトになった場合、審判員はそのときにはタイムをかけて不利益を取り除くよう処置をするのである。よって、今回の話題のケースは、本塁でのタッグプレイがあった時点で「タイム」をかけ、塁審を集めてオブストラクションがあり、そのため２塁走者の不利益を取り除きホームインを認めること。タイムをかけた時点で、１塁走者が３塁付近まで来ていたので３塁を与え、打者走者にはどの塁を与えるかを確認した後、３塁付近をポイントしてオブストラクションがあったことを宣告し、それぞれの走者をどの塁に置いて試合を再開するかを指示する。

起点を利かした行動

2025/11/3

中学のクラブチームの試合、審判は二人制。１回の表、２アウト走者なしで３番打者が左中間に大飛球を打った。中堅手と左翼手が必死で追いかけていた。内野内に素早く移動した球審には、中堅手が腕をのばしグラブの中に打球が入ったところまでは確認できた。しかし、そのとき左翼手が中堅手に激突し、そのまま二人は倒れたまま動こうとはしなかった。ボールの行方は判断できない。球審はマウンド近くまで出たがボールは見えなかった。その間、打者

は３塁を廻りかけていた。打球の確認に外野まで走ると本塁の触塁ができないと悩んでいたとき、走者の３塁触塁を確認した塁審がダイヤモンドを出て外野に走り始めた。そして、捕球を確認してコールをしてくれた。

ホーメーションにはない動きを素早く取り、事態を解決してくれた塁審のファインプレイに感動した。

突然の出来事

2025/11/3

同じ試合での出来事である。走者１・３塁、最も予想されるのは２盗であろう。投球を落球した捕手がボールの行方を探そうとして慌ててマスクをはずした。捕手の足元にあったボールの上に捕手マスクのベロが被った状態になった。周りをきょろきょろしていた捕手が気付き拾い上げたが走者の動きはなかった。球審は「ザッツ　ナッシング」とコール。ベンチは球審のコールの意味が理解できなかったようである。しかし、読者の皆さんは理解できたでしょう。マスクが投球に触ったのは意図的ではないので、「ディタッチド　イクイップメントではない」ことを知らせたのでる。

もし、「ディタッチド　イクイップメント」であれば、２走者を１つずつ進塁させて、１点を認め走者２塁で試合を再開させなければならない。みんな知らないから、何もしなくても一緒だなどと仕事をサボってはいけない。